

カルロ・カッラの形而上絵画におけるフォルムの探究

池野 絢子 京都造形芸術大学

未来派の代表的な画家の一人であったカルロ・カッラ(1881-1966)は、1916年、「色調や線の関係が持つ単純明快さ」のなかにこそ「近代性」が現れると述べ、前衛画家から一転して、ジョットやパオロ・ウッチェッロら初期ルネサンスの画家たちの作品に、新たな芸術の模範を見出すようになった。本発表では、このようなカッラの変遷において過渡期と見なされる1915年から1921年までの時期を対象として、彼の制作にあつて伝統と近代性がどのように結びついていったのかを、当時描かれた絵画と著されたテキストの両者の分析を通じて考察するものである。

カッラは1917年にフェッラーラでジョルジョ・デ・キリコ(1888-1978)に出会い、形而上絵画の旗手となる。両者は短期間の蜜月の後に決裂し、最終的に形而上絵画という流派の先導権を争う関係になるが、この時期のカッラは、デ・キリコの強い影響下を通過しながら、「日常的なもの」の持つフォルムを重視した独自の形而上絵画論を展開していた。

本発表では特に、カッラが18世紀の哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコ(1668-1744)の思想を参照していたという、美術史家マウリツィオ・カルヴェージの指摘に注目する。カルヴェージは、カッラの《形而上学のムーサ》(1917年)のマネキン像を、ヴィーコの主著『新しい学』(第三版1744年)の扉絵に登場する盲目のホメロスに関連づけ、ニーチェやショーペンハウアーといった「北方の」哲学者を思想的源泉としたデ・キリコに対し、カッラはヴィーコの哲学のなかに、形而上絵画のイタリア的水脈を見ようとしていたと論じた。確かに、このナポリの哲学者を広く世に知らしめた哲学者ベネデット・クローチェ(1866-1952)の著作『ジャンバッティスタ・ヴィーコの哲学』は1911年に出版されており、カッラをはじめとするイタリア人芸術家たちが彼の著作を熱心に参照していたことは、同時代資料から裏付けることのできる事実である。

カルヴェージはヴィーコの思想を専ら概念やモチーフの着想源とみなし、その図像的類似性を強調したが、これに対して本発表では、文明の起源における原始の詩人たちの言語についての『新しい学』の記述と、カッラにおけるプリミティヴなるものの共通性を検討したい。ここから明らかになるのは、具体的なものの持つ「単純なフォルム」を称賛するカッラの形而上絵画が、ヴィーコの哲学を媒介にしつつ、プリミティヴなものへの回帰と純粋なフォルムの探究とを同一視していったことである。以上の分析を通じて、カッラの形而上絵画期の模索の内実を明確化するとともに、より広くは、美術史家ロベルト・ロンギ(1890-1970)による当時のイタリアのフォーマリズム言説とカッラとの関係性についても明らかにする。

(いけの・あやこ)